

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463542

研究課題名(和文)「認知症本人と家族支援のためのWebサイト」の充実と教育的活用の効果に関する研究

研究課題名(英文) Study on the improvement and educational effect of web site for the persons with dementia and family carers

研究代表者

竹内 登美子 (takeuchi, tomiko)

富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・教授

研究者番号：40248860

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は筆者らが構築した認知症の語りWebサイトを公開し、その活用状況を評価して内容の充実を図ること、および教育に活用した効果を明らかにすることである。認知症本人10名と家族介護者35名に半構成的インタビューを実施し、テーマ分析法を用いて分析した結果、5カテゴリーと29トピックに分類することができた。そのWebサイトを公開し最近1年間の活用状況を評価した結果、最もアクセス数が多かったトピックは、対応に困る言動(不穏・暴力・妄想)であった。認知症の語りWebサイトを看護教育に導入し、グループ討論を実施した結果、認知症本人と家族介護者の語りを組み合わせた提示法による学習効果が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to evaluate the utilization situation and enhancement of a "narrative web site of dementia" that the authors developed and to clarify the effect of its use for nursing education. We conducted semi-structured interviews with ten persons with dementia and 35 family carers. We analyzed the data using thematic analysis and classified it into 5 categories and 29 topics. After updating the website and evaluating its utilization in the last year, the topic accessed most frequently was speech or conduct (unrest, violence, delusions) that was troublesome to deal with. Subsequently, the web site was introduced in nursing education and group discussion was conducted. As a result, it was suggested that the presentation method that combined the person with dementia and family carers had a learning effect.

研究分野：高齢者看護学

キーワード：認知症 家族介護者 ウェブサイト 教育的活用 語り

1. 研究開始当初の背景

2010年の厚生労働省の調査によると、歳を重ねるごとに認知症の人数が増加し、85歳以上では男性の22.2%、女性の29.8%に認知症症状が出現している。このような状況の中、認知症の患者やその家族が抱える不安や悩み、そして介護者の負担は増大し続けており、「認知症本人とその家族に対する支援」に関する研究は、非常に緊急度の高い重要な課題である。

我が国では2007年に開設されたJ-POP Voiceのがん患者の語りサイトや、厚生労働科学研究の助成を受けて2009年には乳がん患者の語りサイト¹⁾、さらに2010年には前立腺がん患者の語りサイトが公開された。しかし、認知症に関する体験を集約・データベース化して情報発信しているWebサイトは、2012年10月時点の我が国において現存していなかった。

本研究は、2009年から2012年度に採択された基盤研究(B)『認知症本人と家族支援のための「健康・病・介護体験の語り」Webサイトの構築と評価』の成果を発展させる取り組みである。先の研究では、英国Oxford大学で質的研究の調査分析法を用いて作成されたデータベース Database of Individual Patient Experiences ; DIPEX (現在は、<http://www.healthtalkonline.org/>) を参考にしながら、わが国独自の保健医療福祉制度や文化に対応した「認知症の人と家族介護者の語りWebサイト」を構築した。英国DIPEXの認知症の語りには本人は含まれていないが、本研究においては介護者だけでなく認知症本人の語りを含めて分析し、独創性あるサイト構築を目指した。ビデオ映像という表情や声の調子等の情報が加わった介護者や認知症本人からの語りの公開は、同じような状況にいる本人・家族・周囲の人々の気づきを高めることができ、孤独感、トラウマ、不安、混乱等の緩和・改善が図れること、ピアサポ

ート効果を在宅に居ながら得ることができるという意義がある。さらに、量的研究では明らかにすることが困難な、個々の状況を取り上げることによって、一般の人々の認知症に対する偏見が改善するだけでなく、医療者や福祉関係者にとっても認知症と共に暮す生活者の理解を深めることができるようになるという意義は大きいと考えた。

2. 研究の目的

筆者らが構築した「認知症の人と家族介護者の語りWebサイト」を公開し、その活用状況を評価して内容の充実を図ること、および本Webサイトを看護学教育に導入し、教育に活用した効果を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 公開したWebサイトの評価

内容の信頼性と妥当性

基盤(B)で構築したWebサイトを公開する前に、テーマ分析後のトピックサマリーの妥当性と情報の正確さについて、医師や専門職からなるアドバイザー委員から内容確認を受けた。また、個々の研究参加者にトピックサマリーを郵送し、内容の確認と再度Webサイトへの掲載の承諾を得た。

Webサイトの更新と評価

2013年7月にWebサイト「認知症本人と家族介護者の語り」を公開した。その後は、多様性を確保する条件を満たした方のインタビューを継続しながら随時更新してきた(公開中のサイトは2016年7月更新)。

Webサイトの評価については、サイトの公開期間のうち、2015年9月1日から2016年8月31日までの1年間のアクセス状況、およびWebコンテンツに寄せられたコメント回数と内容を分析した。

(2) Webサイトの映像を教材とした学習効果 研究参加者の公募

「認知症の看護」に関するワークショップに参加した看護師に、本研究の概要を説明し自由意思による参加者を募った。

研究期間と研究方法

2016年9月～10月に、Webサイト上にあるアルツハイマー型認知症の夫の語りと、その介護者である妻の語りを複数選び、各々約30分間にまとめたプログラムを作成した。

その後、研究参加者に“認知症に向き合う本人と家族の気持ちについて考察する”という課題を提示して、最初に認知症本人の映像を、次に介護者である妻の映像を視聴してもらった。その後、課題に関するグループ討論を実施し、最後に、ビデオ映像を導入した教育方法に関する満足度等を、5段階評価するアンケート調査を実施した。

(3)倫理的配慮

当大学及び当該施設の倫理審査委員会の承認を得てから実施した。データは個人が特定されないように番号化し、連結可能匿名化を行った。Webサイトに掲載する映像・音声・文字については、事前に研究参加者・代諾者へ個々の内容を郵送し、削除希望部分や研究参加辞退の有無を確認した。

学習効果を明らかにするためのアンケートは無記名とし、所定の位置に回収箱を置いて提出は任意とした。

4. 研究成果

(1)公開したWebサイトの充実と評価

基盤(B)で構築したWebサイトの充実

a. 研究参加者の概要

インタビュー参加者は、北海道から九州地方まで、認知症本人が12名で、家族介護者が37名の合計49名であり、このうち、Webサイトへの掲載に同意を得られたのは、認知症本人10名(52～82歳)、家族介護者35名

(34～88歳)の合計45名であった。認知症本人は若年性認知症が8名であり、高齢認知症が2名であった。内訳は、アルツハイマー型8名(男性5名・女性3名)、脳血管性が1名(男性1名)、レビー小体型認知症1名(女性1名)であった。

家族介護者(男性10名、女性25名)は、若年性認知症の家族が14名、高齢認知症の家族が21名であり、アルツハイマー型認知症24名、脳血管性認知症5名、レビー小体型認知症5名、前頭側頭型認知症2名、正常圧水頭症認知症1名の診断を受けた方々の介護体験者であった(重複あり)。

インタビューの総時間数は約3,500時間、平均して1名あたり約1時間20分の長さであった。認知症本人・家族介護者あわせて45名中の25名が映像収録に同意され、13名が音声のみ、7名がテキストのみの収録を希望された。

b. テーマ分析の結果

これら45名の逐語録をテーマ分析し、「認知症の診断と治療」「認知症の症状とどうつきあうか」「介護の実際と資源の活用」「認知症になるということ」「介護者になるということ」の5カテゴリーを抽出した。OSOP方式で抽出した概念を例示するトピックは、「症状の始まり」「認知症のタイプと症状の違い」「日々の暮らしを支える」など29トピックであった。それら29のトピックに対して477個のクリップが抽出された(2016年8月現在)。なお、11個のクリップは2つのトピックと重複して分類され、1個のクリップは3つのトピックと重複して分類された。

c. Webコンテンツの構築

Webコンテンツは、トピック・語り手の立場・認知症のタイプのそれぞれの項目を一覧にしたトップページ、各トピックを説明するトピックサマリーページ、各トピックに関連する語りを抽出して、語り手かつ内容別に作

成したクリップページ、語り手のプロフィールとその協力者の語りへのリンク一覧を掲載したプロフィールページで構成した。

クリップページには合計 477 個のクリップ（認知症本人 98 個、家族介護者 379 個）を組み、各ページは左上に動画または語り手の写真、その下にクリップで語られる全文、右上に語り手のプロフィールの概要を配置した。477 個のクリップのうち、対象者の語りを映像で掲載したクリップは 295 個、音声を掲載したクリップは 104 個、テキストのみ掲載したクリップは 78 個であった。クリップに使用した映像ファイルならびに音声ファイルは、スマートフォンに対応するため MP4 形式で制作した。映像と音声の合計時間は 13 時間 25 分 42 秒、平均時間は 2 分 1 秒であり、最も長いもので 4 分 48 秒、最も短いもので 27 秒であった。

さらに、クリップページの閲覧者が当該クリップの語り手に対して感謝したいと思ったときにクリックできる「ありがとうボタン」と、コメントを自由記述できる「ひと言」欄を設置した。

公開した Web サイトの評価

a. アクセス状況

Web サイトにおける 2015 年 9 月 1 日から 2016 年 8 月 31 日までの 1 年間のアクセスを集計した結果、477 クリップページへの合計アクセスは、75,647 回であった。このうち、7 名の認知症本人と 35 名の家族介護者へのアクセス率は、17,889 回（23.6%）と 57,758 回（76.4%）であった。

個人別のアクセス数では、認知症本人では 7,489 回、介護者では 4,498 回が最も多かった。また、クリップページあたりのアクセス数では、認知症本人では 258.2 回/ページ、介護者では 379.4 回/ページが最も多かった。カテゴリー別のアクセス数およびクリップ

ページあたりのアクセス数は、「認知症の症状とどうつきあうか」（24,826 回、243.4 回/ページ）、「認知症の診断と治療」（20,602 回、202.0 回/ページ）、「認知症になるということ」（12,599 回、118.9 回/ページ）、「介護者になるということ」（10,595 回、153.6 回/ページ）、「介護の実際と資源の活用」（7,025 回、71.7 回/ページ）であった。

トピック別のクリップページあたりのアクセス数では、「対応に困る言動：不穏・暴力・妄想」（791.8 回/ページ）が最も多く、次いで「症状の始まり」（487.5 回/ページ）、「レビー小体型認知症に特徴的な症状：幻覚・替え玉妄想・認知機能の変動」（358.6 回/ページ）、「診断されたときの気持ち（認知症本人）」（236.1 回/ページ）、「認知症のタイプと症状の違い」（226.0 回/ページ）の順に多かった。

クリップページの 1 日あたりの平均アクセス回数は全体で 0.43 回/日であり、最も多いクリップページで 5.98 回/日、最も少ないクリップページで 0.01 回/日であった。また、クリップページの閲覧時間は平均 1 分 37 秒/回であり、最も長いクリップページで平均 3 分 46 秒/回、最も短いクリップページで平均 32 秒/回であった。

クリップページを閲覧した端末のオペレーティングシステムは、Windows または Mac OS が 61.5%、スマートフォンやタブレット端末で使用される Android または iOS が 38.3%、その他が 0.3%であった。

b. ありがとうボタンのクリック状況

クリップページとインタビュー参加者のプロフィールページに設置した「語ってくれてありがとう」ボタンが押された回数は 1,772 回であり、601 回（33.9%）が認知症本人の体験談に対するもの、1,171 回（66.1%）が家族介護者の体験談に対するものであった。最も多く押されていたのは、認知症介護

者のクリップの 67 回であり、次に多く押されていたのは認知症本人のプロフィールページであった。

また、クリップページとプロフィールページを合計したページあたりのクリック回数は 3.4 回/ページであり、認知症本人が 5.6 回/ページ、介護者が 2.8 回/ページであった。個人別では、認知症本人では 11.2 回/ページ、認知症介護者では 7.2 回/ページが最も多かった。

(2) Web サイトの映像を教材とした学習効果

研究参加者は病院、訪問看護ステーション、福祉施設に勤務する 30～60 歳代の看護師 11 名であった。

グループ討論で出された意見のうち、「認知症本人の語りを聴いていただけでは分かりにくかった言動の意味が、介護者の語りを聴くことによって明確になった」という内容に賛同する声が多くあった。また、「家族の苦労だけでなく、認知症本人と共に新しい生き方を模索する姿を知ることができた」という意見も数多くだされた。これらは、認知症本人と家族介護者の語りを組み合わせた提示法による学習効果だと考えられた。また、疾病自体よりも“病を持ちながら生活する人”の方に関心が向いた結果だとも考えられた。

ビデオ映像を導入した教育方法に関する満足度の平均は、4.7(5 段階評価)であり高い満足度が示された。

< 引用文献 >

<http://www.dipex-j.org/breast-cancer/>

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

林浩靖、竹内登美子、青木頼子、牧野真弓、新鞍真理子、軽度と高度認知機能低下のある

若年性認知症者の就労継続に関する体験と
思い-再就職後の就労場面に焦点を当てて-、
日本看護研究学会雑誌、査読有、Vol.39(5)、
2016、pp.97-104

竹内登美子、青木頼子、牧野真弓、新鞍真理子、
公開シンポジウム「もっと知りたい認知症
体験者の声から学ぶ」の概要と参加者の
反響、富山大学看護学会誌、査読有、
VOL.15(1)、2015、pp. 43-51

〔学会発表〕(計 4 件)

竹内登美子、岡本恵里、小澤和弘、佐藤りか、
後藤恵子、射場典子、Building and utilizing
a website titled “experiences of people
with dementia and family carers narrated
through video and audio interviews”, 32th
International conference of AD
International, 2017 Apr.26-29: 京都国際
会議場(京都府・京都市)

米山真理、竹内登美子、新鞍真理子、青木頼
子、牧野真弓、レビー小体型認知症の人を在
宅で介護する家族の体験、日本老年看護学会
第 21 回学術集会、2016 Jul.23-24:大宮ソニ
ックシティ(埼玉県・大宮市)

竹内登美子、長江美代子、岡本恵里、田中敦
子、アルツハイマー型認知症高齢者を介護す
る家族の体験-症状の始まりから診断周辺の
家族介護者の思いや対応、第 34 回日本看護
科学学会学術集会、2014 Nov29-30: 名古屋
国際会議場(愛知県・名古屋市)

小澤和弘、竹内登美子、佐藤りか、後藤恵子、
射場典子、認知症本人と家族支援のための
「病・介護体験の語り」による Web コンテン
ツの構築、第 13 回情報科学技術フォーラム、
2014 Sep3-5; 筑波大学(茨城県・つくば市)

〔図書〕(計 1 件)

竹内登美子 他、日本看護協会出版会、「認知症の語り」本人と家族による 200 のエピソード、2016、613

〔その他(計 4 件)〕

解説(電子ジャーナル): 竹内登美子、未だ根治療法のない患者さんに安心を提供するには、ナースプレス、2015、

<https://nursepress.jp/218569>

解説: 竹内登美子、健康と病の語りデータベースプロジェクト; 認知症の語り、泌尿器ケア、Vol,19、2014、pp.94-95

報道: 認知症とわたしたち-生きていけると伝えたい、朝日新聞 2013.9.21

HP: <http://www.dipex-j.org/dementia/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内 登美子 (TAKEUCHI, Tomiko)
富山大学・大学院医学薬学研究部・教授
研究者番号: 40248860

(2) 研究分担者

小澤 和弘 (OZAWA, Kazuhiro)
岐阜県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号: 20336639

岡本 恵里 (OKAMOTO, ERI)
三重県立大学・看護学部・教授
研究者番号: 20307656

新鞍 真理子 (NIIKURA, Mariko)
富山大学・大学院医学薬学研究部・准教授
研究者番号: 00334730

(4) 研究協力者

佐藤 りか (SATO, Rika)
後藤 恵子 (GOTO, Keiko)
射場 典子 (IBA, Noriko)